

留於本村社人往後律在寺地目上京江成後は願書附

第八

江島
本村

二十九

一、世友松等、京江吉田殿ありて神祇院同行よりおぼ
并左殿為昇進上京江成後は願書附
運為は赦免なり
東江松等、京江吉田殿ありて神祇院同行よりおぼ
後京江成後は願書附

一、世友松等、京江吉田殿ありて神祇院同行よりおぼ
後京江成後は願書附

成
七
月

江島
本村



南江松等

三
月

大
江
松
等

江
島
本
村

一、世友松等、京江吉田殿ありて神祇院同行よりおぼ
後京江成後は願書附

常
平
子
年
在

通老

懋

中村社人把後得石守改祓祓徒月并五歲為昂進
上京依之往來日數八十日為進當之義願之通す唐
書今尤本立日限り出さる流籍下す也の東竹方石心得
下心守之

留聲
步後和

山本村
西ノ中
石ノ下

唐 李

法後所

江國教人來社人等以上京由國信使所遣書附

无

沼田郡八木村

世度名手神威隨月行事以古傳希友職仕庶民預
中上象以免件京志仕吏古俗猶以古要上學古史古
吉國趨至多願通古調友職從士位下沒名伊路被
作付何也述古辭及悅五種多古古古古古古古古

以在處分以別封下後多由是而持江一時也其時
 以以石以處分是上より下より在石は其言其由は遠慮
 程重く難長は合ふ事有る直交は作上より下より其
 事付人より進上より下より
 中より
 成九月九日
 社人等署名
 守野

示書通預告より石より金より石より進上より
 信より石より金より石より進上より石より進上より

以九月九日

人
 人

留部
 石役不

右社藏進目書付五升

沼田郡八木村社人肥後倅左守繼目上京仕度段御願書附

沼田郡

覚

八木村

一此度私義京都吉田殿おゐて神職繼目行事御相伝

并官職為昇進上京仕度奉存候間、往来共日数八十日之間

逗留御赦免被為成遣被下候ハ、難有仕合可奉存候、尤

京都旅宿之儀ハ、吉田殿御内ニ而田口四郎右衛門所ニ止宿仕候

積ニ御坐候間、何卒早々御赦免被為仰付候様、宣被仰上

可被下候、出立之義ハ御免許之上日限可申上^与奉存候、依^而

此段書附を以奉願上候、以上

社人肥後倅

戊七月

左守

当分庄屋

正三郎殿

庄屋

忠左衛門殿

与頭中

前書之通、願出申候ニ付、得斗相しらへ申候処、相違無御座候間、願之通り
御赦免被為仰付被下候様仕度奉存候、為其書付取次奉願上候、已上

戊七月

当分庄屋

正三郎

庄屋

忠左衛門

与頭

平左衛門

同

弥五郎

同

庄左衛門

沼田郡

御役所

式通上候事

右御免許状写

態申遣ス

其村社人肥後倅左守儀、神職繼目并官職為昇進

上京、依之往来日数八十日之間、逗留之義願之通聞届

遣候、尤出立日限申出候ハ、添翰下ケ遣候条、此旨相心得

可申聞者也

吉田殿 幕府は京都の吉田家（吉田神社社家・卜部氏）を通して全国の神職を統制。全国の神職は上京して吉田家の神道講習・神道裁許状を受けた。相統・改名・位階・官職・装束も吉田家が免許

沼田郡 八木村庄屋
御役所 正三郎
戊八月 同 忠左衛門
与頭共

沼田郡八木村社人左守上京出立日限之儀御願書附

沼田郡 八木村 覚

一 此度私義神職繼目上京仕度段御願奉申上候処、早速御免許
被為仰付出立日限願上候ハ、御添翰御下ケ可被為遣旨難有
仕合奉存候、右二付来ル廿六日出立仕度奉存候間、何卒御添翰
御下ケ渡被為遣被下候様、宣敷被仰上被下候、此段書付を以奉
願上候、已上

戊八月廿日 社人肥後俸 左守

当分庄屋
正三郎殿
庄屋
忠左衛門殿
与頭中

前書之通頼出申候二付、得斗相しらへ申候処、相違無御座候間、
御添翰御下ケ被為遣被下候様仕度奉存候、依而書附
取次奉願上候、已上

戊八月廿一日 庄屋 式人
与頭 三人

沼田郡 御役所

沼田郡八木村社人左守儀上京帰国仕候段御注進書附
沼田郡

八木村 覚

一 此度私義神職繼目行事御相伝并官職仕度段、御願
申上蒙御免許、京着仕直二御添翰御屋敷江差上申候、夫方
吉田殿ニおゐて願之通相調、官職從五位下改名伊勢与被
仰付、何々迄も速ニ相済恐悦至極ニ奉存候、当帰京之節
御屋敷方御別封御下ケ渡被為遣所持仕、一昨七日罷帰り
申候間、御取次差上可被下候、右二付御苦劳差悔御慈悲之
程重々難有仕合奉存候、宣敷被仰上可被下候、此段

書付を以御注進奉申上候、已上

戌九月九日

社人左守改名

伊勢

当分庄屋

正三郎殿

庄屋

忠左衛門殿

与頭中

前書之通願出申候二付、得斗相しらへ申候处、相違無御座候、
依而京都御屋敷之御返翰取次、此段書付を以
御注進奉申上候、已上

戌九月九日

庄屋

式人

与頭

三人

沼田郡

御役所

右神職繼目書付相済